

# コメントライナー

第6636号

2019年1月30日(水)

## ◎前触れなき津波からいかに命を守ったか

防災・危機管理アドバイザー 山村 武彦

### ◆比較的少なかった犠牲者

インドネシアは昨年9月に続いて12月22日にも津波に襲われた。しかし、今度の津波は地震起因ではなく、ジャワ島とスマトラ島の間にあるスンダ海峡の火山島噴火による山体崩壊津波だった。土曜の夜、地震もなく、津波警報もない、まったくの「前触れなき津波」。この津波による死者は426人、行方不明者29人、負傷者7202人(12月29日現在)。

延べ約50kmにわたる海岸線を最大7mの津波が前触れなく襲ったにしては、人的被害が比較的少ないと感じた(9月の死亡・行方不明は3400人以上)。突発津波をどうやって察知し、どうやって命を守ったのか、その疑問に答える報道はない。そこで正月休みを返上し、現地を回って聞き取り調査をした。被害が多かったのはジャワ島西部、バンテン州のスンダ海峡沿い。三陸浜街道を思わせる入り組んだ海岸線は、ヤシの葉陰に瀟洒なコテージや民宿が連なるリゾート地域。

### ◆「風の匂いがいつもとちがう」

海から約30mの道路沿いにあるシーフードレストランの経営者ムクシンさん(52)の話。

「その夜、店には客が数人いた。8時頃、鳥が一斉に飛び立つ音で外へ出ると、くるぶしまで水が来てすぐ引いた。高波かと思ったが、風もなく、満天に月と星。耳を澄ますと、ザワザワという波の音がした。何かがいつもと違う、嫌な予感がした。念のため客と家族を高台に避難させ、自分は火を落とし、店を閉めたところへザーという音。津波だと直感し、すぐ裏山へ走った。斜面で約2~3mの波に追いつかれたが足を怪我しただけで助かった」

女子中学生(10)の母、マスナワチさん(36)の話。

「2つの家族が集まったの食事が済み、みんなくつろいでいた。そのとき、放し飼いの鶏たちが樹上で騒ぎ出した。そして、海の方からたくさん車の音が向かってくるような音が小さく聞こえた。みんなが表へ出たが何ともない。しかし、娘とほかの子供たちは『風の匂いがいつもと違う、大波がくるかもしれない』と叫んで、一斉に山に向かって走り出した。つられて大人たちも後を追った。その後すぐに約3~4mの津波がバリバリと木々をなぎ倒しながら押し寄せてきた。その日は月が皓皓としていて、その月あかりと子供たちの感性・行動力に助けられた」

### ◆自己防衛本能を退化させてはならない

津波から生き残った15人の証言に共通していたのは、鶏、野鳥、犬など動物の異常行動や海や風の変化など、かすかな「宏観現象」に耳を澄ませ、五感を働かせ異常を感じ取っていること。限られた情報の欠片を組み合わせ、津波を予見し迅速に避難して助かっている。

個人差はあるが、人には生まれつき「胸騒ぎがする」「虫が知らせる」など、危険事象を警戒し、回避しようとする「自己防衛本能」が備わっている。しかし、今の日本の洪水、土砂災害、津波対策は、警報や避難情報ありきの避難訓練が主体。経験したことのない災害が多発する時代、それだけでは前触れなき突発災害に対応できないだけでなく、結果として各自の自己防衛本能を退化させる。災害の教訓に国境はない。国家として先進的な防災システムの利活用と共に、ひとり一人の危機回避力向上にも意を注ぐべきではなかろうか。

(やまむら・たけひこ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003